

想の發展に關心を有する人々には一讀得る所多きを信するのである。

(Historische Zeitschrift Bd. 147, Heft 1, 1932) 【鑑見】

●日本地理學史

藤田元春

先きに日本民家史、尺度綜考を著して歴史地理研究に獨自の方面を開拓しつゝ、あつた著者は、三度その健筆を奮つて、本書を世に送り學界を驚嘆せしめた。本文八章、附録二篇、圖版約八十、菊版五百頁に達する大冊である。紹介の便宜の爲本文の目次を擧ぐれば、

第一章、日本に於ける郷土地理學の發達

第二章、朝鮮に現存せる日本地圖

第三章、海外で寫された行基圖

第四章、東洋に於ける地圖測繪の發達

第五章、新井白石と利瑪竇

第六章、郷土地理から世界地理へ

第七章、世界及日本國屏風

第八章、日本で出來た地球儀

(各章細目及附録省略)

各章は、嘗て著者が本誌並に地理教育其他に於て同じ題目によつて發表されたものであり、従つて元來獨立的のもので全卷を通讀せずとも讀者はその欲する一章を直ちに理解し得る長所があるが、著者が訂正加除以て統制ある一卷に纏めんとされた努力にも拘らず、尙諸所の重複と各章間に有機的統一を缺くの短

所を免がれてゐない。その内容は一見して明らかなる如く、主として日本地圖の發達を東洋及西洋との交渉過程に於て述べたもので正しくは日本地圖史論とも稱すべきもので、本來の地理學史的記載は第一章及第六章のみに止まり地圖史への序論をなす形である。

然しながら地圖が重要な地理學的資料の一つである事は勿論であつて、その意味に於て地圖を中心とせる日本地理學史と云ふ事ができる。先づ著者の地理學史的概観を見るに、我國に於ける地理學的業績は和銅の風土記言上を以て始る。その體裁文體、その編者等より考證するに、それが漢書地理志や郡國志等の支那地理學の濃厚なる影響によつて成された事を知り得る平安朝には延喜式、和名類聚抄の撰があり、室町時代に拾芥抄、新撰類聚往來、人國記等現はれたけれども、王朝政治の振はざる暗黒時代の事として學問は萎微して振はなかつたが徳川氏の江戸に幕府を開いて以來天下昌平再び地理學が復興するに至つた。近世に於けるその發達は主として高木利太氏に從つて概説し、世界地理に就いては天文十二年ホルトガルの人の渡來以後、ヨーロッパとの直接交渉開け御朱印船の活躍となり、鎖國後も幸ひ和蘭を通じて世界知識は漸次我國に浸潤して行つた。殊に新井白石の采覽異言、西洋紀聞の著あるに至つてより漸く蘭學の盛況を見多くの地理書地圖が翻譯される事となつた。以上古代と近世末に稍詳しい以外は地理書の書名、著者、内容等を列擧して、發達變遷の跡を簡単に述べられて居る。

愈々本論の地圖に就いては、第一章に於て日本總國圖として一番流布されたものは所謂行基圖である。之は恐らく天平年間聖武天皇の命によつて諸國から國郡の圖を奉つたものにより行基が編纂したらしく、それが延暦年間に至つて諸國の新圖により改正されたものが今日の行基圖であらう。その特色は兎羽が桃の實形に非常に突出してゐる點にある。嘉元三年（西紀一三〇五）製仁和寺所藏の圖が現存する最古のものである。而して拾芥抄に記載さるゝに至り我國に於て廣く行はれたのみならず朝鮮支那にも傳へらるゝに至つた。尙この他に、古事類苑所載著者の所謂二中層圖なるものがある。之は足利期の寫本であるがその原本は大治三年（西紀一二二八）であり従つて嘉元の行基圖よりも二百年も古く寫されたもので、その形兎羽が尙突出せず不明瞭であり行基圖に比して非常にプリミティブであるから行基圖以前の日本圖であると思はれる。然しながら著者のあげられた論據のみでは兩者間の新舊を決定するには尙不充分であるが、著者がこの二形式を以て日本圖の源流とせられた事は眞に卓見で之によつて著者は内外多數の地圖を系統的に分類組織する事に成功された。即ち第二章に於て京城帝大、中村拓氏の撮影蒐集された朝鮮に現存せる日本地圖六本を、京大地理學教室藏本と比較研究され、地圖の形式とその附記の内容によつて、その傳來關係を明らかに併せて我國に於ける地圖發達の過程を決定された。著者によれば徳川時代正保國繪圖改正以前は二中層圖及行基圖の形式が行はれ、海外にもそれが傳へられつ

あつたが、寛文二年の扶桑國圖は正保の繪圖によつて行基圖の改められたものであり形式に於て全然新なるも尙行基云々の註記があり、延寶六年及八年の日本古圖も同様である。それに次いで日本大繪圖、本朝國鑑綱目等が現はれ元祿以後は行基云々を廢して、岡工江城府下石川流宣の署名を見出す。依つてこの形式を流宣圖として他より區別する。之に對して大阪に於て大日本國備圖と稱するものが作られ一色刷とは云へ、その正確さに於て前者に勝つてゐる。かくて徳川時代日本圖は扶桑圖・流宣圖、國備圖に三大別する事ができる。第四章には之等の地圖製作技術の發達を考へ、その起源は支那古代の井田の法をその儘紙面にあらはした處より期せずして方格圖の様式があらはれ、この圖法は我國に輸入され大化改新頃より行はれ大日本古文書にはその好例が多數納められてゐる。方格圖の書き方は斐秀の云ふ製圖の六體で、分率（縮尺）、準望、方位、關係位置の決定、道里（距離の實測）等である。二中層圖、行基圖等も之によらずして盡く事はできなかつたであらう。徳川時代正保、元祿、享保三面の國繪圖は分率皆一里六寸であり元祿、享保には準望により各國圖が接合されたのである。長久保赤水は經緯線のものを入れた大日本輿地路全程圖を作つたが之はやはり方格圖より出たもので蘭學の影響による眞の地理學的經緯線は伊能忠敬に至つて始めて用ひ得ることとなつた。

第三章に於ては、二中層圖行基圖が海外に於て寫されて行つた事を述べた。二中層圖は最も早く支那に傳はり、その攻略圖

及東南海夷國等の古圖は之に加ふるに後漢書や唐時の知識を以てしたもので日本の南北に種々の想像の島を書き入れたものであつたらう。後世の行基圖にある雜刹や鷹道と云ふ島は、この支那古圖の反響である。室町時代に出來た朝鮮申叔舟の海東諸國記、明の鄒舜功の日本一鑑は何れも優れた日本地誌であり、その附圖は行基圖である。然るに朝鮮・虜倭圖、大清一統輿圖等後世のものに却つて二中厝圖の系統と目せらるゝものゝあるのは、尙古の弊風の然らしめたものであらう。又西洋に於ける日本圖の發達に言及し、石橋桑原兩博士に從つてペハイムの地球儀(一四九二)に至る迄を述べ、ペハイムに於て日本の位置が大體より遠く離れ、著しく南下せるはマルコポーロの紀行の不備によるとなす從來の通説を駁し、ポーロの記事そのものが後漢書や東南海夷圖に誤られたものであり、ポーロがジバングは支那大陸より東千五百里にありと云ふのは唐書倭人傳日本去京師一萬四千里より朝鮮に至る距離を除き、餘をイタリー里に換算せるものであるとなした。斯かる考證に至つては實に著者の獨壇場である。新大陸の探檢の進捗に從つて日本の位置がだん／＼正しくなり、その形も最初二中厝圖の歪流と見なすべきものから一五九五年版オルテリユウス以後見事な行基圖となつてゐる。一七〇〇年ビーターヴァンテルアー出版の日本圖の原本はウイリヤム・アダムスの送附したもので恐らく慶長元和の頃のものであり、シヨイヒツエルが増補したケンペル日本史所載圖の據る處は延寶版である。

次に我國に於ける世界圖の發達を述べられるが、蝦夷の探檢の進歩と共に世界圖が完成されたと云ふ見地からして北邊に活躍した内外人の事蹟を稍詳述されてゐる。著者によれば我國の世界圖は三期に分たれる。第一期は利瑪竇 (Matteo Ricci) の坤輿全圖に依る時代で、プロセクシオンは卵形で地球の南方に廣大なるメガラニカを有し蝦夷は少し現はれてゐるが形不明で、ベーリング海峡はなく想像のアニアン海峡とアニアン國がある。第二期はオランダ政府獻する處のアラウの地圖を参照した新井白石に始まり、彼は坤輿全圖を批判しメガラニカを除くに至つた。以後漸次進んで日本の北に蝦夷や千島カムチャツカを記すが、北米の西北部は未詳として殘し、専ら平射圖法による兩半球圖が行はれた。第三期は北邊が愈々明らかとなりオーストラリアの地形定まつて世界圖が完成した時で各種のプロセクシオンが用ひられる。高橋作左衛門の新訂萬國全圖の如き蘭人ヘスセルをして賞讃措く能はざらしめる程に達した。第八章は、我國に於ける世界圖の三時期にそれ／＼地球儀も亦製作されてゐた事を述べる。即ち伊勢徵古館藏の濫川春海作のそれは第一期のものでその據る處は利氏の坤輿圖である。京都帝大地理學教室のそれは第二期に屬し直接オランダ地球儀を和譯したものである。安政三年以後見事なものが製作さるゝ事となつた。尙特殊の地圖としては東洋の古海圖で我國に現存する南洋鐵路圖(帝室博物館)、東亞航海圖(故原教授及末吉氏角屋氏所藏本)を、その日本及朝鮮の形より年代を決定し少くとも慶長

九年以前には遡り得ないと云ふ。地圖の裝飾化されたものとして、は先づ有名な秀吉の扇面地圖につきオ尔特リユウス一五九五年版より恐らく數年以前に作られた筈で而も日本朝鮮支那の正確なる事前者の比でなく、當時世界最新の東亞輿地圖であるとその學的價值を評し、淨得寺の世界圖屏風に於ては菅田伊人氏が秀吉當時のものであるとされるに對し、之はプロセクシヨンの心得のある人が作つたものでメガラニカ、アニアン海峽をなかくしてゐる處より世界知識のよほど進んだ後のものであるとして當初の考へを讒へされない。序に日本圖屏風に就いても論ぜらるゝ處があつた。附録は一は佛教徒の世界觀を明らかにし一は嘉永當時の日露交渉に就いて述べたものである。以上によつて著者が本書に於て取扱はれたものゝ大體を紹介したつもりであるが、著者の博學なる東西古今の資料を引證し論說又縱横多岐して到底限られたる紙面に盡す事はできない。筆者の不明によつて妄言を敢てした處又逸脱せる處少くないと思ふ。著者の諒恕を請ふ次第である。之を要するに地圖史を中心とする日本地理學史への貢獻に於て Paul Graf Tschudi の Atlas zur Geschichte der Kartographie der Japanischen Inseln に優るとも劣らざるものであり後進を益する事至大であらう。之を一言にして評するならば書き換へられたテレキとも云はるべきであらう。(昭和七年十一月三十日發行 定價 四圓貳拾錢 刀江書院)〔米倉〕

紹介

● 讃岐高松石清尾山石塚の研究 梅原末治氏著

京都帝國大學文學部考古學研究報告 第十二冊

昭和八年の上半期に於いて、日本考古學の天界に二つの盤煌たる星が忽然として輝いた。一つの星は後藤守一氏の「上野國依波郡赤堀村今井茶臼山古墳」であり、他の星は梅原末治氏著の「讃岐高松石清尾山石塚」の研究である。

前者は帝室博物館歴史課を背景とし、後者は京都帝國大學考古學教室を背景として生れ、孰れも我古墳研究史上に於いて忘れることの出来ない地位にあるだけ、この期を同じうして生れた研究は、色々な意味に於いて非常に注意の惹かれるものである。古墳の研究が、今日如何なる程度迄發達して居るかはこの兩書が最も雄辯に物語るだらう。さて、その中後藤氏の著作に就いては他誌で記したので、今こゝに梅原氏の研究報告に就いて紹介し、併せてその出版を記念したい。

本書は、濱田博士の主宰する京都帝國大學文學部考古學教室に於いて發行して常に學界に於ける指針ともなり又一種の測度計の如き地位をも占めて居る研究報告の第十二冊として生れたものであり、我古墳に於いて特殊な構造を有する石塚を研究の對象として居る。即ち讃岐國高松市外の石清尾山上に立つ猫塚・石船塚・姫塚・鏡塚・北大塚・稻荷山姫塚等々の積石によつて構成せられた興味深き古墳に就いて、その構造・出土遺物を考察し、更に後論に於いて石塚の持つ特性を擧げ其年代を考證し、以て